

B 【実践コース】点訳ボランティアになろう (定員10名)

会場：2回目は秋田県点字図書館 [秋田市土崎港南3丁目2-58] へ現地集合
 8回目は秋田県立視覚支援学校 [秋田市上北手百崎字諏訪ノ沢3-127] へ現地集合/その他は秋田県生涯学習センターに集合
 地域社会で視覚障がいのある方々との共生や社会福祉について考えるとともに、点訳のスキルを学び、視覚障がいのある方々を実践的に支援できるボランティアの育成講座です。(全受講を原則とします。)

日	時	テーマ	講師	
B (全受講となりませ)	8/22 (水)	講座の趣旨と視覚障がいについて理解しよう	秋田県立視覚支援学校 (ロービジョン支援センター) 教諭	
	8/29 (水)	点字図書館に行ってみよう ～館内見学と点字の基礎～	秋田県点字図書館職員	
	9/5 (水)	点訳について理解を深め、点訳を体験しよう	点訳指導 石山美幸氏	
	9/12 (水)	点訳作業 (1) ★トワイライト講座		
	9/19 (水)	点訳作業 (2)		
	9/26 (水)	点訳作業 (3)		
	10/3 (水)	点訳作業 (4) 作品を完成させよう		
	10/20 (土)	点訳した作品を届けよう ～視覚支援学校・秋百祭交流～		
		9:00～11:30		現地集合

学んだことを具体的な行動に結びつけるモデルとして、昨年度から開講しているのが「行動人講座・実践コース」です。このコースは、「地域や周囲の人のために何かをしたい」という方の学びを、より実践的にサポートすることを目的に、地域課題などの「本質論」とそれを行動に表すための「方法論」をセットで学べるプログラムで実施しています。

今年度は、視覚障がいのある方々の読書や生涯学習を、点訳のスキルによってサポートできる人材の育成を目指した「点訳ボランティアになろう」という講座を行いました。

B1 8月22日(水)「講座の趣旨と視覚障がいについて理解しよう」

初回は、本講座の趣旨について、秋田県生涯学習センター職員が学びを行動に結びつけることの重要性や意義について説明を行いました。その後、秋田県立視覚支援学校の長崎雪子教諭から、「見えない、見えにくいことへの理解について」と題して講話をしていただきました。

長崎先生は、「視覚に障がいがあると言っても、見え方はその人によって大きく異なる」ことを様々な具体例をもとに説明されました。そして、アイマスクを使用した「視覚障がい疑似体験」を行い、周囲から得られる情報に誘導してもらいながら、自分の手で近くにある物を触ることの難しさを学びました。体験を通じて、受講者は「視覚障がいのある方々は、“見る”以外の感覚を研ぎ澄ましてじっくりと周囲の状況を確認するので、点字は触って分かる情報・安心できる情報として非常に重要である」ことを確認することができました。



B2 8月29日(水)「点字図書館に行ってみよう」



第2回の講座は、「秋田県点字図書館」を会場に行いました。点字図書館は、貸し出しの希望を受け付け、利用者に対して蔵書である点字図書を郵送している機関です。点訳などのボランティアグループが多数所属しており、作業や勉強会を行ったり、そういった作業を行う人材(奉仕員)を養成したりしている機関でもあります。

この日は、熊谷公彦館長から沿革の説明と館内案内をしていただきました。普段は入ることのできない書庫や発送作業の部屋なども見学させていただきました。また後半では、点字図書館職員の阿曾裕子氏から、点字の基礎となる入門知識を教えてくださいました。受講者は、これから実際に自分たちが使うことになる点字器や点字盤を手にして、「しっかりと作業に取り組んでいこう」と気持ちを新たにしている様子でした。



B3 9月5日(水)「点訳について理解を深め、点訳を体験しよう」

B4～7 9月12日(水)～10月3日(水)「点訳作業(1)～(4)」



いよいよ、第3回からは点字を実際に打つ体験をしながら、作業を進めていきました。今回点訳を指導していただいたのは、点字図書館の「わかち会」に所属し、点訳奉仕員養成講座の講師も務めている石山美幸氏です。

現在はパソコンによる点訳作業が主流ですが、受講者が挑戦するのは、点字器と点字盤を用いた手作業での点訳でした。石山氏は「普通文字を入力するだけで自動的に点字に変換されるようなパソコンソフトは開発途上で、パソコン点訳であっても“どの点を打つか”直接入力する必要があります。だからこそ、この手作業の点訳を経

験して点字を覚える過程は誰もが通る道なのです」と教えてくださいました。

点訳する課題図書候補は3冊あり、その中から取り組みやすい2冊を事前を選んで、グループに分かれて作業を行いました。本来、日本語の書籍等を点訳する場合は「分かち書き」というルールがあり、視覚障がいのある人が点字を正しく読み理解するため、文節の間に区切りとしての空白を挿入します。しかし、文脈上どこに区切りを入れるべきかは様々な検討を要する場合があります、このルールを理解するには相当な時間が必要とのことでした。そのため、本講座では石山氏に「分かち書きを行った下書き」を事前に作成してもらい、受講者はそれに基づいて点字を打つ作業を進めました。



本講座には、中学生・高校生から80代まで、幅広い年代の受講者14名が参加していました。8回全ての受講を原則とした講座でしたが、仕事や学校の試験などと日程が重なり、やむを得ず欠席した受講者もいました。また、個々に作業を進めるスピードが異なるので、最初に分担したページ数をこなすことが難しい受講者もいました。そのような時に、早く作業が進んでいた受講者が「作業を手伝います」と声をかけ合う姿なども見られました。その結果、当初の予定よりもスムーズに点訳作業を終えることができました。

B8 10月20日(土)「点訳した作品を届けよう～視覚支援学校・秋盲祭交流～」

最終回は、製本作業を経て完成した2冊の点字図書を、秋田県立視覚支援学校の文化祭「秋盲祭(あきもうさい)」に参加して、自分たちの手で届ける講座でした。

はじめに、視覚支援学校の鈴木修一校長から「目が見えなくても、児童・生徒は美術作品の制作や創作劇に取り組んでいます。障がいを抱えながらもその先にある自分の世界を表現している姿から、皆さん自身も“点訳という作業の先にある世界”について考えてみてください」というお言葉をいただきました。



その後、体育館で児童・生徒の皆さんの弁論発表・器楽合奏・創作劇などを観覧し、最後に点字図書贈呈式を行っていただきました。受講者代表の佐藤光晟さん(中学2年生)と原凜さん(高校2年生)が視覚支援学校の代表生徒に点字図書を手渡しました。代表の方はその場で本を広げ、本の題名を読み上げていただきました。

最後に、受講者同士でこれまでの学びを振り返る時間を設けました。「一人ひとりが主役の素晴らしい文化祭でした」「なかなか見に来る機会がなかったので、来ることができてよかった」「点字図書の

題名を実際に読み上げてくれたのが嬉しかった」「普段の高校生活では体験できないことばかりで、参加して本当によかった」などの感想が寄せられました。

正式な点訳奉仕員になるためには、点字図書館が行っている所定の講座を受講する必要がありますが、受講者からは「引き続き点字を勉強していきたい」という声も聞かれました。点訳ボランティアを目指す人が増えれば、視覚障がいのある方の読書、すなわち生涯学習を支える人材が増えることにつながります。今回は、障がい者の生涯学習支援のあり方について考える講座となりました。